平成２９年度　環境科学院　修士論文内容の要旨

中国，泰山世界ジオパークとジオツーリズムの現状と課題

北海道大学大学院　環境科学院
環境起学専攻　人間生態システムコース
張　志洪

【背景】1999 年に「ジオパーク」という言葉がパリのユネスコ国際会議で初めて提出されて以後、ジオパークはジオツーリズムの実践と自然環境保全の枠組みの一つとして、世界中で注目されるようになってきた。2018 年 1 月現在、34 ヶ国・地域に 127 の世界ジオパークが認定され、世界ジオパークとそれぞれの国・地域が認定する国内ジオパークは、ヨーロッパとアジアを中心に多くの大陸に分布している。中国では35の世界ジオパークが認定されており、世界で最も多くの世界ジオパークを有している。

本研究では、世界の中でも早い時期からジオパークに関心を寄せて取組みを進めてきた中国の事例に注目する。その中で、泰山ジオパークは Global Geopark Network (GGN)により 2016 年に世界ジオパークに認定された。

【目的】本研究では、泰山世界ジオパークを対象として、その特徴を明らかにし、そこで行われているジオツーリズムの現状を明らかにし、泰山世界ジオパークの持続可能性を高めるために必要な課題について議論する。

【研究方法】本研究は、主に文献調査と現地調査によって行った。文献調査については、ジオパークに関連した文献と泰山管理委員会において収集した資料の分析を行った。現地調査については、2015 年 4 月 22 日～5 月 5 日まで（第 1 回）と 2016 年 9 月（第２回）に、インタビュー調査とアンケート調査の形式で行った。インタビュー調査については、泰山世界ジオパークの管理部門である泰山管理委員会の職員を対象とした。アンケート調査については、主に観光客を対象にして、アンケート調査表 560 部を配布した。アンケート調査は、主に泰山世界ジオパーク入口の紅門と出口の天外村で行った。現地調査の 1 回目には有効調査表 420 部を回収して、2 回目には有効調査表 100 部を回収した。本研究ではこの合計 520 部の調査表を用いて、観光客のジオパークについての認知度と意識を分析した。

【結果および考察】泰山世界ジオパークの整備やジオツーリズムの展開に係るほとんどの活動は、山東省国土資源庁が中心になって行われている。2006～2015 年のこのジオパークの収入の急激な増加を見ると、ジオパークは現地の経済発展に貢献したと考えられる。アンケート調査の結果から、ジオパークを聞いたことがない観光客は 184 人（約 36%）に過ぎず、ジオパークの認知度はかなり高かった（約 64%）。しかしジオパークを聞いたことがある観光客の中で、泰山ジオパークが世界ジオパークに認定されたことを知っている観光客は 143 人（全体の 28%）に過ぎない。また学校の授業で「ジオパーク」に関する勉強をした観光客の割合は 28%に過ぎない。生涯教育を含めた、ジオパークに関する教育の普及はまだ足りない。アンケート調査とインタビュー調査から、泰山世界ジオパークのインフラが整備されていないことを不満に思う観光客がいた。ジオパークの管理者たちの関心事は、ジオパーク申請・認可取得とその後の収入増加を目指した活動だけで、ジオパークの保護を考えた計画ではない。このことは、泰山管理委員会の職員数が 1749 人であるのに対して、ジオ専門職員が 4 人しか配置されていないことからも理解できる。泰山世界ジオパークでは，外部向けには「ジオ知識紹介のイベントを行って、地質遺跡の保護とジオ知識の普及を促進した」とされていが、実態としてはジオについての専門的な人材と科学的な開発の方法が不足していると言える。